

みなと

今・むかし新聞

第5号

平成18年9月

港区生涯学習センターのすぐ近くに

明治時代の建造物が！

「明治は遠くなりにつれ」良く聞く言葉ですが、明治時代最後の年、明治四十五年に生まれた方でも今年の誕生日（たんじ）で満九十四歳となりますから、確かに遠くなったと申せましょう。

食事や衛生環境（かんき）の改善、医学の進歩などのお蔭によって昔と違って長命な方が増え、今や百歳以上の方が日本全国では二万人を越すとのこと、先ずはおめでたい限りであります。

ところで、建築物となるとどうでしょうか。明治時代に造られたものとなるとほとんど残っておりません。特に東京の場合関東大震災としてこの前の戦争と二度に亘って大きな被害（ひが）を受けただけでなく、休むこ

となく発展を続けていて、建てては壊し、壊しては建てるを繰り返していますので建築物の寿命（じゅみ）は大体において短いのです。

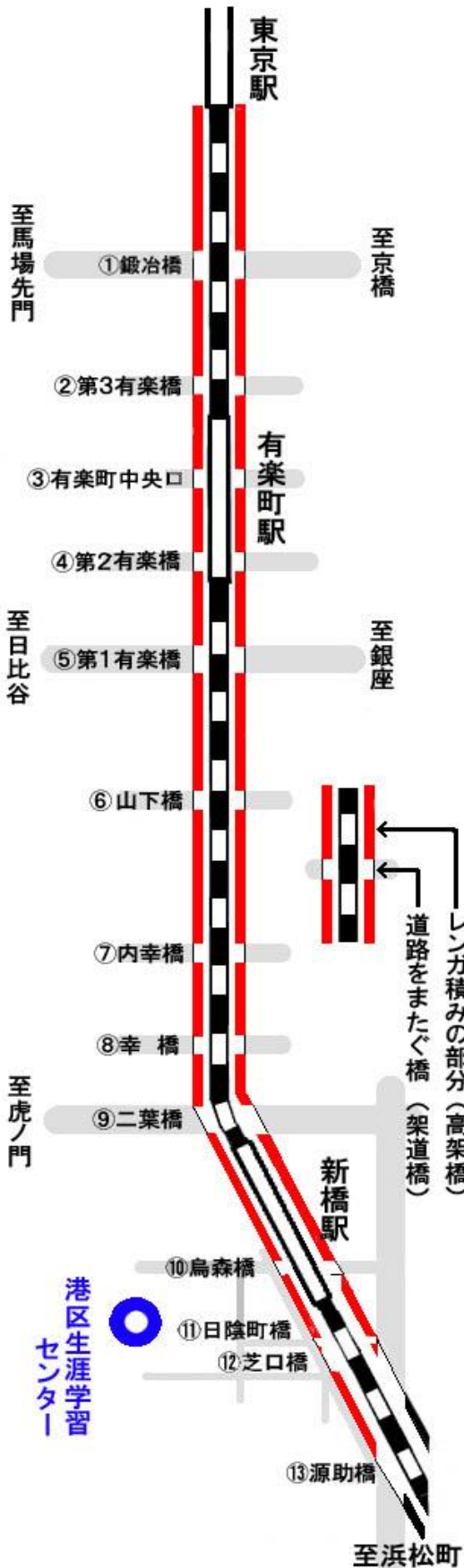
そのようなことから、神社仏閣（ぶ）は別としていわゆる実用的な建築物となりますと、明治時代どころか大正時代のものですらほとんど残ってはおりません。

そこで明治時代の建築物がこの港区生涯学習センターのすぐ近くにあると言っても信じて貰えないかもしれない。ところが、厳密（げん）な意味で「たてもの」とは呼べないかも知れませんが明治時代に建造されたものがすぐ近くにあるのです。

では、そこへご案内しましょう。センターを出ましたら道路を新橋駅に向かって歩いて頂きます。すぐにJRのガードのところに出来ますが、その手前で立ち止まってください。そして目の前にあるガードを挟（さ）んでの両側、上を京浜東北線や山手線の電車が走っている高架（か）の部分を見てください。赤レンガを積み重ねてできているのがお分かりと思います。この赤レン

◎ レンガ積みの高架構の上を走るのは京浜東北線と山手線の電車です。東海道新幹線及び在来線は並行していますが別です。

レンガ積みの部分（高架橋）
道路をまたぐ橋（架道橋）



上 新橋第一ホテル前
の高架構
左 古くからの住人に
とっては懐かしい町
の名が！



ガ積みの高架構が完成したのは新橋駅から浜松町駅寄りの部分が明治四十二年、新橋駅から東京駅方面にかけてが明治四十三年でした。

左上の図をご覧ください。この赤レンガ積みの高架構は新橋駅の南、第一京浜道路と交差（さ）するところから東京駅まで続いています（この地図では省略しましたがその少し先まで）。下の空間は飲食店をはじめいろいろな業種に貸し出されていますので完成当時の姿そのままだと見ることは難しいですが、それでも第一ホテルの真向かいあたりですと何とか昔の姿を偲（おも）ふことができます。

開通時に発行された絵葉書を見たことがあります。が、小さな車両が一両だったか二両だったかで走っていました。今ここを走る京浜東北線は十両連結、山手

線は十一両連結です。

しかも車両そのものもはるかに大型化しています。ですがこの高架はびくともせず、今なお実用に耐えているのです。これを設計施工（せつこう）した当時の担当者にとって百年後のこのような状況は果たして想定内であったのでしょうか。（井上 繁）

区内あちこちから

三年坂あたり

西久保八幡神社で、ご近所散策の挨拶をしてから裏側に回り込むように進むと、宗教団体の立派な建物の前に出る。その門前、雁木坂（がんぎ）を登り右側にもう少し歩けば、きれいに整えられている急勾配の坂が現れて、「三年坂」の名称とその由来を書いた説明板がある。「三年坂（産寧坂）」といえはもちろん本家は「清水の舞台」で知られる京都清水寺への参道の一つなのだが、ここ麻布の三年坂にもよく似合う。



この道は窪地まで下ってから、向かい側の高台に緩（ゆる）やかに登るのだが、表通りからばかり眺めている目にはほっとする風景があたりにはひろがっている。暮らす人が工夫と丹精を重ねて守っている、和やかな空気の漂（た）う町の姿である。

見上げると首が痛くなるような、ナントカ長者達のお城の活気やキラキラ輝く現代風も嫌（きら）いではないが、車が通らない、行き交う人も少ない道をのんびり歩くのも悪くないものだ。

坂を登った突き当たりが旧町名で麻布市兵衛町。永井荷風さんが住んでいたところだったが、すっかり様相一変、ビル街になった。迷子になりそうでも探訪に行ってみたいが、今回はここで引き返し、仙石山の細道を辿り、神谷町方面に下って行くことにした。（武 恒雄）



三年坂を上から見る

語り部 小学校へ

私たち『語り部』は港区内の学校からの依頼(い)で戦前戦中の暮らしの様子を生徒にお伝えする活動をしてあります。平成十七年度は5校に招かれました。そこでお話した一部を紹介(かい)します。

皆さんの三年生の頃は？ ―学校のようす―

小学校で三年生からの『語り部』の皆さんの三年生の頃の話をしてください』という問いかけに、明るい教室でかわいい子供の姿を前にして、私たちはいっぺんに昔の教室を思い出しました。そうです。私の三年生は七十年前位前になりますね。

関東大震災(大正十二年九月一日)で学校が焼けてしまったので、私が一年生に入学したときの学校はバラックで木造二階建てでした。二年生の秋に鉄筋(てつ)三階建ての立派な校舎ができあがり、そこで勉強することになりました。教室には二人並んで座る机、机のふたを開けると、教科書や筆箱を入れることができ、ランドセルは腰掛の背中にかけておきました。新しい学校は、音楽室、図画室、工作室、理科室。理科室は準備室(びん)や器械(き)や標本(ひょう)といった標本室と合わせて三つの部屋。骨格(こ)標本はガイコツといって、みんなでそっと見に行きました。講堂(こう)といって今の体育館ですね、体育をやったり、入学式・卒業式(うし)・祝祭日(し)の式などをしました。

教室にはスチームといって、ボイラーで石炭を燃やしてお湯を沸かし、そのお湯が教室に設置(ち)された金属の管の中を通って暖房され、暖かい教室で勉強することができました。でも戦争中にこの装置(ち)は取り払われ、金属の管は供出されました。戦後、はじめは教室に大きな火鉢に木炭、その次は石炭ストーブ、そしてガスストーブというように長い年月の間に変化してきました。今は冷暖房完備(かん)の教室、昔の人はこんなよい設備(び)になるとは思いませんでした。一年生の頃の写真を見ると、女の子はオカッパで白いエプロンをかけて友だちと写っています。担任(たん)の先生は着物をきて袴(はか)をはいていました。洋服をきていた女の先生もいました。(廣畑 美恵)

着物 ―着物・羽織・帯 着てきました―

私が小学三年生の頃は、お母さんはいつも着物を着て、割烹着(か)を掛けて一日中働いておりました。

朝にしてもお母さんは朝ご飯の支度(し)をするため家族の誰よりもはるかに早く起きていました。私が目を覚ますとプーンとお味噌汁(み)の汁の匂いがして、台所(だい)からはトントンとまな板の上で何かを刻む包丁の音が聞こえてきました。

母が着ていた着物ですが、夏はゆかた、冬は暖かい綿入れの着物や半纏(はん)など、季節に応じて違いました。母の絆(ひ)の着物姿は忘れられません。

学校へは反物(はん)を持って行き、生徒さんに一反の長さを測って貰いましたら12メートル49センチありました。この一反の布から裁ち方(か)によっていろいろな着物が出来ることを説明しましたが、三年生にはとても不思議(ふ)に思われたようです。

一反の布は三千個の「繭(ま)」からできることもお話ししました。繭から絹織物(き)ができることも驚きだったようです。蚕(かい)が桑(わ)の葉を食べて育ちやがて繭となり、そこから取れる絹の糸で反物が織られるという、ごく普通に思われたことが今の日本では余りにも遠くにいつてしまいました。私が着ていた羽織(り)を着てみたいというので、着せてあげたら軽くて暖かいと喜んだ男の子。足袋(ひ)を見て「指が二つなんだね」と可愛(い)らしく目を輝(か)かせた子。一枚の布が、着物、寝巻(ね)、おしめ、最後(さい)は雑巾(ぞう)と大切にに使われたことなどを含め、昔の生活は手がかかり、時間もかかるけど、心に伝わるものがあると生徒さんにお話ししましたが、熱心(ねん)に聞いてくれました。

着物を着ていると、春夏秋冬が袖口(そで)、衿元(えり)から伝わって来ます。四季が肌で感じられるのです。帯(お)を締(し)めると背筋(せ)がぴーんとなり、気持ち引き締まります。私が小学校一年生のとき黒板の上のところに「姿勢(せい)正しく、礼儀(れい)正しく」と書かれた額(が)が掲げ(か)られていました。子供たちにお話しているとその額が目に浮かんできました。これから機会(い)があれば生徒さんと共に昔の生活をもう一度振り返り、日々心豊(こ)かに暮らして行きたいと思っています。(中嶋 房子)

なつかしい 数え歌

私が子供のころ、数を数えるとき、一、二、三、四と数えるのとは違った子供なりの数え方がいろいろとありました。

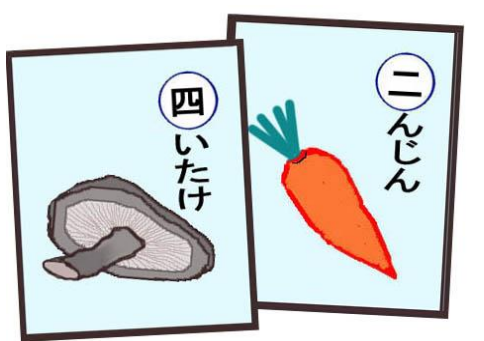
そのひとつが「は・ま・ぐ・り・は・む・し・の・ど・く」

鬼(お)ごっこやかくれんぼでは、鬼は遅(お)れて動き出しますが、そのために鬼は例えば三十数えてから動くときめることがあります。そのとき、一、二、三と三十まで数える代わりに

「の・ぎ・さ・ん・は・え・ら・い・ひ・と」

を三回繰(く)り返しました。これはゆっくりと言わなくていけません。早く言つては『するいよ』と言って叱(しか)られてしまいます。

二つずつをまとめたの数え方として「ちゅう・ちゅう・たこ・かい・な」というのもありました。



「いちじく・にんじん・さんしょに・しいたけ・こぼろに・むかご・ななくさ・やえな・このめ・とうなす」。

これはまりつき遊びでまりをつく回数(かい)やおはじき遊びでおはじきの石を分けっこするときなどに、歌った数え歌です。

私が幼いとき面倒を見てくれたのが明治八年生まれの祖母(ば)でした。その祖母がよく口にしていた言葉に次のようながありました。それこそ聞かされること何千回にもなりましたので、幼いながらも私の頭の中にしっかりと沁(しみ)みこんで、八十になっても忘れません。「伊勢・新潟・三河・信州・神戸・武蔵・名古屋・函館・九州・東京」

(いせ・にいがた・みかわ・しんしゅう・じうべ・むさし・なごや・はだて・きゅうしゅう・とうきよう)

(松本トミ子)

新橋の昔を語る(座談会)

(第4号からの続き)

- D 話は変わるけど、私のところは5人きょうだい全員が氏神(かみ)さまの烏森(からす)神社で名前を付けて頂いた。
- B うちもそうだ。でも誰のかわり映(は)えしないというか、近所によく似ている名前が多かった。
- C でもそれは別に烏森神社のせいじゃなくて、昭和の初め頃は、女の子の名前にはナニ子って下に子がついたのが多かったからじゃないかな。そのナニ子のナニに当るところの字は違うんだけど、読み方が同じのが多かったから、名前を呼んだときには同じになっちゃう。マサコとか、ヨシコとか、トシコとかなんか多かったわね。
- E 女の子の名前のおしまいは「コ」が多かったけど、男の子では「ヲ」で終わるのが多かった。
- C その「ヲ」のところは雄、男、夫。字では違うけれど、呼ぶとなると同じになっちゃう。(次号に続く)

生涯学習センター通信

残暑がまだ厳しい折ですが、季節は確実に「秋」へと向かっております。食欲の秋、読書の秋など一年で一番好きな季節です。この四月から担当が代わりました。前任に負けないよう頑張りますので、よろしくご指導・ご支援をお願いいたします。

毎月二回、第二・四水曜日に港区立生涯学習センター「さくらだ記念室」に語り部の皆様が集まり、「港区の今・昔」の勉強会を開催しております。その活動成果を、「みなと 今・むかし新聞」として発刊し、学校教育や生涯学習の参考として提供しております。

「温故知新」という言葉がございいますが、港区の昔と今の姿を比較してみることも良いことだと思います。どうぞ、関心があります方の参加をお待ちしております。

問い合わせ 3431・1606
発行 港区立生涯学習センター
平成十八年九月一日